

大友氏を支えた佐賀関の港 ~戦国時代の佐賀関地区~

佐賀関の港は、瀬戸内海を通過して関西へと通じる、九州の玄関口でした。坂ノ市から佐賀関、そして佐伯へと繋がる海岸一帯には、古代より海で活躍した海部一族が暮らし、巨大な首長墓である亀塚古墳(坂ノ市)や築山古墳(神崎)が示すように、大きな勢力を形成していました。そして戦国時代には、大友水軍の拠点、大友氏の貿易港として重要な役割を担っていました。



鳥帽子岳城中腹から見た、佐賀関(左:上浦・右:下浦)

若林水軍の活躍

戦国時代の佐賀関には、若林水軍がいました。首領である若林氏は上野国(群馬県)出身で、12代持直の頃より大友氏の家臣となり、一尺屋上浦地区の摺木・丸尾山に砦を築き拠点としました。

彼らは水主(船乗り)として、船に乗り込んで貿易を行ったり、警固船に乗って合戦に参加したりして、大友氏を支えました。特に1568年に起きた毛利氏との合戦では、若林鎮興は大友水軍の「大将」として、同盟を組んでいた大内輝弘を海から周防国(山口県)に上陸させました。裏をかかれた毛利軍はこの後、北部九州から撤退していきました。



大分市内の主な山城の分布図

港湾都市・佐賀関

島津軍の豊後侵攻、そして豊臣秀吉の九州平定後、領地が豊後1国となった22代義統は、若林氏あてに府内・臼杵にもあった「計屋」を置くなど公平な取引をするよう命じた法度(きまり)を出し、佐賀関の政治・経済の掌握を図っていきます。また義統が上洛の際、上浦にある早吸日女神社で航海の無事を祈願し大坂に向かうなど、大友氏にとっての重要度は、ますます高まってきました。

1593年、秀吉の命令により大友氏は豊後を除国されますが、江戸時代には熊本藩の飛び地となり、港町としての役割は引き継がれていきました。そして、勝海舟・坂本龍馬が肥後街道を經由して長崎へ向かうなど、多くの旅人がここを通りました。

現在も九州と四国を結ぶ重要な航路の1つとして毎日フェリーが行き交い、豊後水道では関アジ・関サバなど高級魚の漁が行われるなど、大分県を代表する港として今日に至っています。



義統が祈願をした早吸日女神社